

四 伝説・史伝

〔信仰伝説〕

1. 天神木

『天神木』という地名がある。

旧沼山津十八番字名で、ここには社も鳥居も無くただ住宅に囲まれた畑の中に、天神塚という直径一・五メートルほどの塚がボツンとあるだけである。もとは大きかったが次第に削られて畑になってしまい、持主は早く削って宅地か畑にしたいが、代々触れれば祟ると言われ残していると言ふ。

『上益城郡誌』に「秋津小学校敷地の字名なり。往古天神丸と言ふ船入航して此の地の樹に繋ぎしより起こると」とあり、地名を船名に由来させている。しかし触れれば祟るとの言い伝えのなかに古い天神信仰がうかがわれる。

(熊本県不思議辞典 松野国策)

2. ゆやろききき(由屋浮木)の権現

西無田若宮神社の御神体について「上益城郡誌」は次のように記している。

〔伝説 慶長三年(一五九八)太閤秀吉薨するや遺命によりて征韓の師を班す 既にして諸軍海に航して故国に向ふの時 加藤肥州公の臣島崎某の船尾に 一大奇木追従し来るあり 某之を再三押流せど 付随すること依然たり。因つて其旨を公に告ぐるに 公凱旋の奇瑞となし 之を同人に賜ふ 後同氏は右奇木を以て神體を彫刻し西無田村(当時託

磨郡に属せし部分)の東北隅(現今の矢田氏の北畑なりと、今も同地を宮屋敷・神屋敷と言ふ)に勧請すと。後元文元年(一七三六)七月村の西部(現今の社地)に遷宮し 延享五年(一七四八)八月神體を彩色して現在に及べり。最初神號をゆやろきき(由屋浮木)の大明神と號し西部に遷宮して熊野宮を祭ると。

しかして鳥居には雨宮と刻せり、又、神體の背部には島崎久兵衛門 同繁右衛門奉祀年號等刻記しありしが 元文六年か延享五年か(多分彩色せしときならん)に刻記せるものを多少削除し 今は島崎半右衛門と記しある由 但彩色しあり且年代を経し 今は如何とも見ることも能はず、社務は飽託郡健軍神社々掌之を執る 而して現今の社殿は安永七年(一七七八)の改築たり。」

(上益城郡誌より)

奇木を持ち帰った加藤肥州公の臣島崎某(島崎半兵衛尉正徑)について川尻町史には「後藤末松氏提供」として次の様に緒言に記されている「徑岑は天文二十三年(一五五四)十一月戦死。

当時島崎半兵衛尉正徑初め名は八郎員徑と云う 父戦死後僅か三歳の嬰兒を乳母懷中に助け 所縁を以て飽田郡川尻の庄に潜住す

成長に従い漁獵を業とせしがその頃征韓の事(注：文禄の役)起こりて加藤氏の命を蒙り 天正十九年(一五九一)船頭を勤め朝鮮に従軍す その際王城より分取せし釜家蔵す 後祿七十石を給ふ 云々

島崎久兵衛正隆家を継ぐ 寛永九年(一六三二)加藤氏出羽国御改易に付以後浪人となる 同十三年(一六三六)益城郡沼山津郷間島と云う処に転住し 漁獵及び開拓に従事し 征韓の際船に付着したる材木を持ち帰り 神像を刻み鎮守すと云う 熊野浮木権現とも云う 云々」

(川尻町史 緒言より)

又、西無田雨宮神社の御神体について、島崎半兵衛尉正徑の子孫筋の森山家には、次のように伝えられる。

「文禄元年(一五九二)加藤清正朝鮮出兵の際、私の先祖第十代島崎半兵衛尉正徑が船頭かしらとして従軍した時。帰路材木が舟についてき

ること依然たり。因つて其旨を公に告ぐるに、公凱旋の奇瑞となし之を同人に賜ふ。後同氏は右奇木を以て神體を彫刻し西無田村（当時託

て、いくら押流しても押流してもついてくるので、これは島崎に何かの因縁があるものだと思ひ持帰り、その一部で御神体を刻んだ。

その残りの材木は今も神殿の下にある。以上の理由で西無田兩宮神社を「兩宮由屋浮木（あめみや ゆやろきき）の権現」と言う。御神体は、正徳四年（一七一四）六月に彩色される。

なお神屋敷から現在地若葉六丁目に移転建築されたのは、安永七年（一七七八）臘月吉日（陰曆十二月）、移転にあたっては十三ヶ村の寄付を募り建立されたものである。

この島崎家は、菊池家第十代武房の第五子左馬之助武徑より始まると伝えられる。

（語りへ学習会）

〔歴史文に伝説〕

3. 西南戦争と秋田村

明治十年四月十四日と思われる。御船方面の戦いで敗れた薩軍の一部が、橋を壊しながら木山へ集結する途中、中無田を通過するとき、村の世話人三藤孫四郎らに、食糧の提供や道案内を強要する。

賊軍への協力を躊躇していると、中無田神社に向けて実弾を発射して、村民を震え上がらせ、言うことを聞かないと火を放ち村中を焼き払うと脅されて協力させられる。

「現に中無田神社の神殿内の柱には所謂西郷弾が打ち込まれたままになっている」

村では戦場になつたら大変な事になるので、女子供を、吉住氏宅裏の孟宗竹林内の、元鷲城跡の窪地に（当時は相当深かつたそう）猫伏を被つて避難させた。なかには身重の婦人がいて避難中にお産があつたりして、村中大変な騒ぎであつた。

「文禄元年（一五九二）加藤清正朝鮮出兵の際、私の先祖第十代島崎半兵衛尉正経が船頭かしらとして従軍した時。帰路材木が舟についてき

（注：当時木山に行く道は、戸島往還より花立往還へ出て広崎の猫伏石を通過して木山に行く道しかなかった。現木山県道は明治三十年完成。）

幸い薩軍は通過しただけであつたので、戦場にはならず済んだが、それを追つて政府軍が通過するときの対応が大変であつた。

四月十五日午後三時頃、熊本鎮台兵二名が三藤孫四郎を間島橋へ呼び出し、間もなく政府軍が通過するので薩軍が壊した橋三ヶ所を一時間以内に修理するように取り計らえとの命令、無理な話だか命令に従うほかはない。大急ぎで西無田用掛り矢田和三郎、下無田（通称新村）用掛り野田伝太に連絡して、大至急人夫を集め、有り合わせの板や材料を持ち寄り応急修理した。

なお矢田和三郎は前日十四日にも六嘉方面から薩軍を追つた政府軍を橋が壊れて渡れないので川船で渡したり、道案内等したりしている。

四月二十一日薩軍敗走後、村へ政府軍進入に出迎え、道案内、下無田には二十二日迄政府軍滞陣のため、宿所の手配、手伝い人夫の手配に追われている。

四月二十四日より政府軍衆が通過する際、又薩軍が焼き落とした橋の修理、渡し船の手配、乗馬の手配等。又五月七日大津方面から隈庄への移動の政府軍の大砲等は橋が壊れて渡れないので、積船の手配や手伝い人夫の手配等々。又沼山津村では、熊本鎮台兵の馬水（益城町馬水）・木山（益城町木山）・御船（御船町）通過の際には数百名の手伝い人夫を出して協力している。

広崎村（益城町広崎）では小倉鎮台兵が進入の際には、熊本往還筋の（地元では花立往還と言っている）猫伏石と言う所で焚き出しをしたり政府軍数千人の道案内、食糧、物品の輸送などに、多数の人夫を動員して手伝っている。

木山に集結した薩軍・党薩熊本隊は四月二十日、二十一日船野山（益城町三〇八メートル）・飯田山（御船町四三三メートル）周辺の激戦に敗れ、矢部方面へ後退して人吉方面へと敗走していく。

西南戦争が終わった後、戦後処理というか、政府軍に協力した者にはなにかの日当が支払われた模様で、協力した内容を書いた文書の写しが残っている。

文書の内容が古文で難しくて分かりにくいのが、次のような文書がある。中無田では「賊徒乱入之際出夫周旋等」と薩軍が通過の際に脅されてやむを得ず協力したのだったが、賊軍の逃亡の手助けをしたと、賊軍協力の名目で日当の請求を却下されている。

戸長吉田泰造（当時は官選戸長）が再度日当下げ渡し願を、熊本権令富岡敬明殿宛に、明治十一年三月二十六日に出しているが。

それに対して「・尽力致候儀ハ人民ノ義務ト相心得夫ニ説諭致可依而書面却下候事」と明治十一年四月二日 熊本権令富岡敬明からの却下の書面である。

村ではがっかりである。婦女子や村を戦火から守るために、薩軍から脅されて協力しただけだったのに。村では政府軍のために道案内、橋の修理、船馬の周旋、輸送の手伝い等に人夫の動員、宿泊の幹旋等々莫大な出費になっていた。

戸長や用掛など当時の村の世話役達が、県と協力した多数の村民の間に立って非常に苦慮された事が窺われる。

注：付図「西南戦争関係図」参照

参考文献 三藤家文書（語りべ学習会 小田邦秀）

4・二二藤孫四郎と秋田小字校建校記

三藤孫四郎には、西南戦争前後の苦慮の外にもう一つ家運が傾くという大きな世話事があった。

村に不学の戸なく、家に不学の人がないようにと明治五年（一八七二）に学制が布かれた。当時各地に所謂人民共立学校が設立された。

秋田小学校を設立する事になり、中無田・西無田・下無田（通称新村と言っていた）の住民が資金を出し合って建てる事になるが、当時の貧し

い農村では一度に出せる金ではないので、差し当たりその時の世話役だった三藤孫四郎（明治十三年戸長民選制になっての初代戸長となる）の田畑を担保にして金を借り、返済は中無田・西無田・下無田の各住民が年賦で償還する事にして、敷地は孫四郎所有の字野間に建てることになった。

設立当初の生徒は男子四十一名、女子三十三名で教員二名、番人給仕人などの人材・設備・教材も追々整いつつあり、資金返済の方も予定通り目途がついて回収しかかったが、運の悪いことに数年ならずして火災にあい学校が全焼してしまった。

学校が無くなったので、その後の返済資金の回収が出来なくなり、孫四郎個人の借金だけが残ってしまった。金利だけが雪だるまの様に膨らんでいく。

学校はその後民家の空き家を、転々と借り細々と続けられていた。

長男清三は先代から交流のあった沼山津の彌富家に、若いときから勉強かたがよく遊びに行っていた。清三が成人したころ彌富家の当主から「お前の家の財産がどうなっているのか」と尋ねられ、何も知らない清三がきよとんとしている、「お前とこの田畑は秋田小学校設立の時の資金借用のため、みんな担保に入っていて、このままだと財産は借金のためみんな無くなってしまふ」と聞かされ、愕然とした。

孫四郎は秋田小学校設立資金に自分の資産を担保に借金していることを子供に一口も言っていないかった。

そう言われてみると思い当たる節があった。農家では米麦粟大小豆等収穫したら、俵入れして蔵か住居の土間に積み、しばし眺めながら収穫の喜びを感じつつ、時期をみて販売していた。

しかし三藤家では事情が違っていた。商人達が（ひょうもん「俵物」買いと云っていた）俵入れが済むのを待っていて、その場であつが持つていってしまう。少しでも金利を減らすためには、そうでもしなければ仕方がなかったのである。

当時アメリカでは所謂西へ西へと西部開発ブームで、道路・鉄道等の

建設工事に大量の労働者が必要で世界各地から労働者が集まっていた。

ないが、とにかく浮き油という現象が時々見られることがあった。

秋田小学校を設立する事になり、中無田・西無田・下無田（通称新村と言っていた）の住民が資金を出し合って建てる事になるが、当時の貧し

建設工事に大量の労働者が必要で世界各地から労働者が集まっていた。

日本からも多数の出稼者が行ったのもたの時であった。清三も現金を得るにはこしかなないと、結婚年頃を過ぎつつあったにもかまわずに渡米して、働きに働いた。稼いだ金を送金して、「今度はどこの田圃を請け返せ、今度は何処の田、今度は何処の畑」と次々に借金を返し、全部の田畑の請け返しが終わってから帰国した。

当時のアメリカ帰りは、大金を持ち帰り豪邸を建て悠々自適の暮らしを送るのが普通であったが、清三はそれどころではなかった。それから我が家の再建に取り組まねばならなかった。その超人的な努力が実を結び現在にいたっている。

人一倍小柄で、ものしずかな清三のどこにそんなパワーが潜んでいたのかと全く驚嘆するほかはない。

参考文献 三藤家文書（語りべ学習会 小田邦秀）

5. かみだりようさんの石油掘り

上田龍三郎・通称かみだりようさんは、沼山津の中でも、指折りの産家で、大正十三年（一九二四）頃、一時村長もしておられた。

大柄で色白な男前で、相当な道楽者でもあったようである。昭和初期頃、夏の頃になると、流行のカンカン帽をかぶり、絹の着物を涼しく羽織りステッキをつきながら闊歩する。煙草は当時高級品の「敷島」というのを、一口か二口吸っては捨て、又新しい煙草に火をつけるといような贅沢な生活をして、当時まだ誰も考えもつかない、運転手付きのサイドカーを乗り回しておられた。

田植え時になると、木山川（現秋津川）は水田用水、取水のために堰をかけ、かなり水位が上がり流れが淀み、ダムのようになっていた。

夏の頃になると、時々水面に油のような物が浮いたように見えることがあった。動植物性の油か、鉱物性の油か、または当時稲の害虫ウンカの駆除に油を使っていたのが、たまたま流れ込んだのか、何だかわから

仕方がなかったのである。

当時アメリカでは所謂西へ西へと西部開発ブームで、道路・鉄道等の

ないが、とにかく浮き油という現象が時々見られることがあった。誰が言いだしたか知らないが、この辺の地下には石油があるのではないかと、突飛な噂話が流れた。

道楽者で、かなり山気のある、かみだりようさんは、もし石油を掘りあてたら大当たりだとばかり、掘削を試みることにした。

昭和初年代の頃である。当時は動力がなかったので、足踏み式の突き棒で、数人の人が交代で作業をしていた。

地層が土砂の所は掘り易いが、岩盤に当たると、なかなか掘れない。

高価なダイヤモンド刃の付いた突き棒で掘るが作業は一向に捗らない、かれこれ一年近くかかって、二十二・三間（約四十メートル）も掘った

だろうか。一向に石油の出そうな気配はない。作業するほうも、いい加減疲れた。期待していた村人も、石油は出んぞう（伝造）と、作業員の名をとりからかいだす。

とうとう石油は出なかったが、大量の水が噴出した。

他にも益城町の福富にも掘ったが、これも水が出た。又秋田の野間にも掘ってみたが、此処では水も出なかった。

石油掘削には失敗したが、怪我の功名というか、大量に噴出した水は現県道小池竜田線脇の水路が清流となり、所謂堂ん前の流れとなって、周辺の人達の生活用水、洗い物や井戸端会議ならぬ川端会議等の交流の場にもなっていた。

一方上田家は井戸掘りの費用が高み、又道楽も過ぎて家運が傾き、家産を整理して、何処かに越されたそうである。

この水は当時沼山津農家の主要農産物の一つであった大根の洗い場として重要な役割を果たしていた。上流から下流までの水路脇に、真っ白に洗われた大量の大根がうず高く積み並べられた様子は全く壮観であった。また貴重な水は、水不足の水田の用水として、木山川（現秋津川）を鉄管のサイホンを通して、利用された。昭和六十年（一九八五）圃場整備事業で用水ポンプが稼働するまで約三十町歩の水田を潤していた。

現在は県道が拡張され、水路は蓋で覆われ、又水位が下がり水も出な

くなり、その役割が終わったが、沼山津には計り知れない恩恵をもたらしてきた。その恩恵に感謝して地元では、一町内公民館敷地内に、「水神」として記念碑を建て、その功績を顕彰している。

注：これは泉秀晴氏・福島新治氏・三藤愛子氏のお話を元にして書いたものである

(語りべ学習会 小田邦秀)

6・猫伏石 (ねこぼくいし)

猫伏石は、横手五郎の伝説に由来する。

加藤清正に親を殺された横手五郎という強力の男がいた。横手五郎は木山弾正の子供であると伝えられている。

親の仇を討つために、清正の隈本城築城の際、人夫として雇われていた五郎は、ある時、清正の命により、城の土台となる大きな石を探していた。

土台となる石はなかなか見つからず、木山川を西原村河原まで遡った所で、やっと見つけることができた。五郎はその石を猫伏に包んで、背中に背負って隈本へ戻ろうとしたが、余りにも大きくて重たいために猫伏がその重さに耐えられず、府内古閑まで来たところで破れてしまった。五郎は小さい石を両手に抱え、大きな石をその場に残して隈本へ帰ってしまった。残された石は途方もなく大きい石なので、誰も動かすことができずに、現在に至るまで横たわっている。

(益城町教育委員会)

7・東野中学校の校名

昭和三十七年(一九六二)に東野中学校が開校した。

この校名は、万葉歌人「柿本人麻呂」の

「東の野にかぎろいの立っ見えて かへり見すれば月傾きぬ」

(笠間書院発行 橋本達雄(編)の「柿本人麻呂(全)による」)

の「東の野」から採り、当時の阿部次郎熊本市教育長が命名された。

西は健軍地区の発展にともない、暫次住宅化のきざしがみえはじめていたが、東や南は広々とした畑地や水田が飯田山麓まで続く風景が、この歌からのイメージと重なったものか。

「大和路文学散歩」では、次のように記している。

軽皇子の一行が荒涼とした「真木立つ荒山道」を越えてはいった宇陀(奈良県)の高原を、今、国道一六六号線が貫いている。

宇陀の阿騎野は、夏青い丘陵の起伏を見せて、その丘のひとつに、人麻呂の「東の野にかぎろいの立っ見えて かへり見すれば月傾きぬ」の歌碑が建っていた。

人麻呂がこの野に泊まったのは、み雪降る冬のさなかだった。人々は亡き草壁皇子の追憶に、夜もすがら語りあかしたことだろう。碑の前の畠に胡麻が薄紫の花をつけていた。

開校四年後、中学校周辺の町名が従来からの村名や字名とのゆかりではなく校名から採られた。

即ち昭和四十一年(一九六六)秋津町秋田の一部が、東野一丁目から東野四丁目となった。

ちなみに、東野中学校の所在地は、東野三丁目六番五十号である。

(語りべ学習会)